

笑ってごらん

第 669 号 2020. 1. 8 発行

～今日の格言～

まず『出来る』って言う。
方法はそれから。

(特撮監督：円谷英二)

新年明けましておめでとう。

ここ鹿児島では穏やかな気候に恵まれたお正月となり、元日の朝、私は初日の出を拝むことができ、なんだか幸せな気分になることができた。ただ、感覚的に『お正月感』に乏しい気がした。

私が小さい頃は、クリスマスが終わると年明け7日くらいまでだいたいの商店が閉まっていた。よって、それまでに食料・日用品は計画的に買いだめしておく必要があった。家族全員で大掃除に取り組んだり、餅つきをしたり年末年始はそれなり

に『特別な雰囲気』があった。

現在は休店するのは元日くらいのもので、当然「買いだめ」の必要はない。そもそもコンビニが開いているので、日常困ることなど



ない。年末だろうが正月だろうが、平常と同じものを食べることができる。そこに『特別な雰囲気』はない。

逆に今回は、「働き方改革」の一環だろうか、コンビニによっては元日休店にするところもあったと聞く。個人的には賛成で、「もっとやれ！」の思っている。たかだか正月三が日くらいは不自由さがあっても良いのではないか。世の中あまりにも便利になりすぎて、我慢することが無くなってきている。便利に、もっと便利に、と言い続けたことが、最終的に『お正月感』を奪ってしまったのではないか。

緩い雰囲気に浸っているとロクなことはない。意識的に自分を叱咤激励し、喝を入れる頃合いなのかも知れない。

完成の学期、第3学期が始まった。学校は久しぶりに皆の元気な笑顔に包まれ、活気を取り戻した。どんな学年の締めくくりになるのか、今から楽しみである。

書籍紹介(始業式挨拶再掲) 『ふるさとって呼んでもいいですか 6歳で「移民」になった私の物語』

著者はイラン出身のナデイさん。

裕福な家庭に育ったが、イランイラク戦争の影響で父親の経営する店が破綻、大きな借金を抱える。家を売っても返済できず、家族全員で日本へ移住。

言葉もわからず、文化の違いもあり、トラブル続き。それでも日本人の子供と遊ぶうちに言葉を覚え、学校へ行きたい旨を大人に訴え、学校では分からない漢字を画数で索引し、掲載されている熟語を国語辞典で調べ、書き留めて覚えることを繰り返した。

最終的には日本で暮らすための様々な書類申請もできるようになった。苦労は多かったが、数々の経験のもと努力の末、日本を「ふるさと」と呼べるまでの感覚になった。

この本には「どんなに厳しい環境にあっても、努力次第で道は拓ける」ことが描かれている。著者の柔軟な考え方や、姿勢に共感と感動を覚える一冊。

● 昨年はラグビーワールドカップで日本中が沸いた。『ONE TEAM』が流行語大賞を受賞し、皆の気持ちを一つにする大切さを学んだ。

今年度はオリンピックイヤー。東京(を中心とした各地)で行われる。終了後は鹿児島で国体が行われる。

昨年に引き続き今年も『ONE TEAM』の活躍から目が離せない。